

研究結果

「芥川龍之介作品にみる戦争」というテーマで、特に「将軍」、「桃太郎」、「金将軍」という三作品に表現された戦争の様相を、戦争における人間のあり方に焦点を当てて分析してきた。その結果、近代戦争における「他者」表象の問題、および「正義」の相対性に対する芥川の認識が浮かび上がってきた。

三作とも、戦争という非日常的な状況の中では、平時においては犯罪である「殺人」が、忠勇無双の証へと変化する現象を描いている。それによって、ナショナリズムの暴力性や戦争の倒錯性を暴露するとともに、「戦場」という非日常空間において「自国の正義」が自己絶対化へと陥る過程を描き出している。

「将軍」での間諜の斬首に喜ぶ曹長と兵士を戯曲的な口調で死地へ送り出すN将軍、「桃太郎」での桃太郎と犬・猿・雉の三従者、「金将軍」での金応瑞と小西行長と加藤清正がそれに当たる。彼らはそれぞれに自分の「正義」を持っていて、その「正義」に反する他者には、否応無しに「鬼」や「奸佞邪智」などの「負」のレッテルが貼りつけられる。それによって、「他者」表象の不当さが指摘されている。

さらに、「桃太郎」においては、元の物語とは「敵/味方」や「善/悪」の軸が転倒されたかたちで描かれていた。そうした転倒した記述によって、「負」のレッテルとともに、それを支えている「正義」もまた普遍的なものではないことが示されている。芥川が描き出す倒錯的な戦争の記述は、「自国の正義」を相対化するための具体的な方法を教えてくれるのである。

また、別の視点で「首が落ちた話」と「奇怪な再会」と、戦争を背景にした二つ作品に表現された怪奇のあり方に焦点を当てて分析してきた。その結果、近代戦争という巨大な暴力という条件下におけるいくつかの問題——理不尽な「死」に直面する時の軍人の内面や精神の問題、アイデンティティと狂気の問題——に対する芥川の認識が浮かび上がってきた。

別の言い方をすれば、芥川の戦争作品における「怪奇」とは、戦争という巨大な暴力を前にしたときに産み出される内面や精神の問題を浮かび上がらせる装置だということができる。「首が落ちた話」は、何小二の蘇生を通して、近代戦争においては殺戮機械とならざるをえない兵士の「人間性の回復」の物語だった。そこでは、戦場での「兵士としての生」に対して、戦後における「無頼漢としての生」が対置されていた。また、「奇怪な再会」におけるお蓮の「狂気」は、敗戦国側の生き残った人間が背負うことになる苦難の重さを示すと同時に、変えることのできない閉鎖的な現実世界から逃れるための最後の手段だったのである。

研究成果の公表について（予定も含む）

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

1. 「芥川龍之介作品にみる戦争と怪談」、陳玫君、台湾日本語文学会第4回例会発表、20100417、台北YMCA。
2. 「芥川龍之介作品にみる戦争と怪奇」、陳玫君、2010世界日本語教育大会、20100731、台湾国立政治大学。（予定）

論文（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

1. 「芥川「将軍」、「桃太郎」、「金将軍」にみる戦争」、陳玫君、『芥川龍之介研究』、2010あるいは2011。（一次審査通過、再度査読中）

書籍（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）